

1P132

乳幼児期に腎移植を受けたこどもと家族の学童期の生活における経験と取り組み

大堀 美樹

東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

【背景と目的】

末期腎不全に至ったこどもに対し、腎移植が積極的に行われるようになった。とりわけ低年齢層での腎移植症例数が増加しているが、乳幼児期の腎移植症例増加からの歴史は浅く、乳幼児期に腎移植を受けたこどもと家族が学童期に達してからの生活の実態は十分明らかになっていない。本研究では、乳幼児期に腎移植を行ったこどもとその家族が学童期にどのような経験をし、生活に適応するためにどのような取り組みを行っているかを家族の視点から明らかにし、腎移植後のこどもと家族に必要なサポートを検討することを目的とした。

【方法】

質的記述的デザイン。データ収集期間は2020年3月～2020年11月。腹膜透析導入後、乳幼児期に腎移植を受けて5年以上経過している学童期のこどもの家族に半構造化面接を行った。研究参加者及びこどもの属性、学校生活及び学校以外の生活における経験、生活に適応するための取り組みについて調査した。データの逐語録をコード化し、サブカテゴリー化、カテゴリー化を行った。所属施設（承認番号.教31-22A）と研究協力施設（承認番号.M19181）の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果と考察】

研究参加者は6名（母5名父1名）。腎移植時のこどもの年齢は2歳7ヶ月～5歳9ヶ月（平均4歳1ヶ月）で、現在9～12歳、腎移植後の経過年数は6～7年であった。通常学級在籍が1名、特別支援学級在籍が5名であった。インタビューの結果23サブカテゴリー、8カテゴリーが抽出された。腎移植後の学童期のこどもと家族は【集団生活を通して、発達や学習の遅れに直面する】【継続した健康管理の必要性による、学校生活に馴染む難しさ】【体調不良時や定期受診で専門外来にかかる大変さ】【こどもの成長と理解ある支援者の存在による、生活の拡大と安定】【将来に向けた見通しの不確かさに対する葛藤】を経験し、家族は【安定した学校生活を送るための、先生との関係構築と活動環境の調整】【より良い選択に向けた情報収集と相談相手の模索】【将来の自立に向け、生活に必要な力の獲得を意識した学校外活動の工夫】を行っていた。腎移植後のこどもと家族が安定した学校生活を送るために、水分管理や腎臓の圧迫を避けるなどの目に見えにくい健康管理が必要であることや、腎移植前の背景を踏まえた現在の発達状況などに対する周囲の理解とサポートの必要性が示唆された。

1P133

先天性心疾患をもつ学童の社会適応能力が母親による病気説明の実施基準に与える影響

—医学的知識の説明に焦点を当てて—

遠藤 晋作、樋口 倫代、堀田 法子

名古屋市立大学 大学院看護学研究科

【目的】

先天性心疾患をもつ子どもにとって重要な母親からの病気説明は、子どもの成長に付随する病気説明選択要因に影響され¹⁾、この要因と母親による病理解解は、子どもに対する母親からの「病気説明の実施基準」となると考えられた。本研究では特に説明が不十分となる医学的知識に焦点を当て、学童期に発達上重要な社会適応能力が「病気説明の実施基準」に与える影響を明らかにし、支援を示唆することを目的とする。

【方法】

対象は先天性心疾患をもつ学童期のこどもの母親とした。調査は2020年3～8月、A病院小児科外来にて、無記名自記式の質問紙調査を行った。質問項目は、母子の属性、子どもの社会適応能力（ASA旭出式社会適応スキル検査）、「病気説明の実施基準」（先行研究¹⁾をもとに項目設定）とした。分析は「病気説明の実施基準」の因子分析を行い、抽出した各因子を従属変数、「社会適応スキル」の4スキル各々を独立変数、母子の属性を交絡因子とした重回帰分析を行った。所属とA病院の研究倫理委員会より承諾を得て、対象者には研究目的と内容、匿名性の保護、参加拒否による不利益がないことを説明した。

【結果】

71名より有効回答を得た。因子分析の結果、第1因子「母親の説明コミュニケーション能力」、第2因子「子どもの説明受容力」、第3因子「子どもの説明アクセシリテラシー」が示され、各因子のCronbachの α 係数は0.71～0.80、累積寄与率62.94%であった。

次に重回帰分析の結果、第2因子に対して言語スキル（ $\beta = 0.35, p < 0.05$ ）と社会生活スキル（ $\beta = 0.36, p < 0.05$ ）、第3因子に対して言語スキル（ $\beta = 0.41, p < 0.05$ ）と日常生活スキル（ $\beta = 0.42, p < 0.01$ ）に有意な関連を認めた。

【考察】

支援として、①専門用語を含めた言語スキルの向上を図って「子どもの説明受容力」「子どもの説明アクセシリテラシー」の基盤を整える、②身の回りのことを自立して行えるように日常生活スキルを高めて「子どもの説明アクセシリテラシー」を向上させる、③社会生活スキルを高めることで社会参加を支持して「子どもの説明受容力」を向上させること、が示唆された。

文献1) 遠藤晋作, 上田敏丈, 堀田法子 (2019): 先天性心疾患をもつ学童期までの子どもに対して母親が行う病気説明プロセス, 日本小児看護学会誌, 28, 274-283.